

優秀賞

第一步は、想像すること

八尾市立久宝寺中学校 三年 加美^{かみ} 千尋^{ちひろ}

その日は雨が降っていた。私はいとこと一緒に、遊びに行くため電車に乗っていた。席は全てうまっていた、立っている人もちらほら。私といとは扉の近くに立って、話をしていた。そんな時、乗っている電車がまた駅に止まった。

「よいしょ。」

と、ゆっくり乗りこんできたのは、背中が曲がって私でも見下ろせてしまうほどのおばあさんだった。ぬれたレインコートに身を包み、手押し車を押していて、歩くのがとてもしんどそうだった。その時はちょうど通勤時間で、近くの席に座っていたのはサラリーマンや大学生。しかし全員、見て見ぬふり。急に眠り始めた人もいた。席をゆずらないといけないと、一目で分かるのに、誰も席を立とうとしない。私といとこが顔を見合わせた時だった。

「どうぞ。」

と、一人の四十代くらいの女性がすくっと席を立った。おばあさんが歩きにくいと分かると、その体を支えて席まで誘導する。びしょぬれのレインコートを脱ぐのを手伝う。迷いのない動きだった。ゆっくりと座ったおばあさんは、その女性の目を見て、ほっとしたように、

「ありがとう。」

と言った。その女性は口角を上げて、何でもありませんよ、という顔をした。そして私たちのそばに歩いてきて、次の駅で降りていった。

その女性が席を立てて声をかけた瞬間に、車内の雰囲気は変わった。気まぐれ後ろめたい感じだったその車両

の空気は、一人の女性のごく常識的な行動によって、一変したのだ。それは全員に空気を通して伝わったはずである。他のサラリーマンや大学生が、自分が行動しなかったことを後悔していると信じている。

電車の中で、座ろうが立とうが個人の自由だ。しかし、「お年寄りや妊婦さんには席をゆずりなさい。」と教えられる。その理由を考えてみる。

それはもう、一口に言ってしまうと「優しさ」とか「思いやり」とか「助け合い」というものではないだろうか。私は、そういった「バトン」があると考ええる。優しさのバトン、思いやりのバトン、助け合いのバトン……。あの女性は、以前に同じことをされたかもしれない。もしくは全く別の場所で、他人の思いやりを受け取ったのかもしれない。受け取ったそのバトンを胸に行動を起こしたのかもしれない。そのバトンは、おばあさんにも託されつつ、女性の中にも輝きつづける。さらに、それを見ていた私にも。輪が広がるとは、こういうことだと実感した。

他人に優しくしたり、助けたりするために必要なもの一つに「想像力」があると思う。「この人は今何を考えているのか、何を必要としているのか。」ということをも、自然に考える力が私たちには必要なのだ。他人だからとか、関係ないとか、そんな垣根を越えて、目の前にいる人に自分は何ができるのか。ちょっとしたことでも、相手にとっては嬉しいものだ。そのことを理解して想像できない人が増えている。第一歩が、想像することなのだ。「他人に優しくする」ことの第一歩を知らない人が増えている。私はそれに強い危機感を持つ。

あの女性が声をかけた瞬間に車内の空気が変わったように、そのバトンを受けとった私を含めた人達は、別の場面でそのバトンを使う義務がある。自分の家族や友達だけでなく、見ず知らずの他人にもだ。それは、その場所の空気を変えるのだ。その場の空気感というのは大事なもので、一たび変化すればその方向に方向に流れていく。それを変化させられるのは私達であり、させなければならぬ。人間はその場の空気に敏感であり、流されやすい。だからこそ、良い空気感に変えていくべきだ。そうすれば、「想像」を知らない人達にも、気づかせることができる。

気づくことができる人を、バトンを使える人を、その場の雰囲気を変えられる人を目指そうと思う。少なくとも何もできない人間にはならないように。